

やしの実不思議塾1st

ティーンズ怪談学校作品集



みどりの翼増刊号

まえがき

どんな土地にも、その土地にしかない不思議な物語や言い伝えがあります。不思議こそ土地の魅力の核心と言っても、言い過ぎではないでしょう。この頃はこうした不思議を探すのがとても難しくなってきたといわれますが、本当でしょうか。私は、ティーンズなら新鮮な目で田原の不思議を見つけることができるのではないか、と思いました。百年ほど前、日本の民俗学の創始者、柳田國男がそうしたように。ティーンズ怪談学校は、「やしの実不思議塾」という事業の第1回として実施したものです。この命名は、明治31年に田原市内の恋路ヶ浜で柳田國男が拾った椰子の実にちなみました。

不思議に気がつく感性、「不思議感覚」とでもいうべきでしょうか。は、芸術から科学まで、人間のあらゆる創造的な営みの発端となります。本年7月31日に田原文化会館で開催したティーンズ怪談学校に参加してください。6人の高校生のみなさんには、作家の悠崎仁先生のワークシヨップで、すばらしい不思議感覚を発揮していただきました。その成果が、この作品集に収められた7つの掌編という訳です。そのうち3編は、田原市中央図書館で本年8月24日に開催したティーンズ向けのイベント、「一夜限りの怪談図書館」で朗読さ

れました。多くの参加者が、アンケートの中で、同じティーンズの書いた地元の不思議にまつわる作品に共感の言葉を寄せてくれたのもとても嬉しいことでした。慣れ親しんだ風物について「こわい」とか「不思議」といった表現がされることを不快に感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、7編の作者たちは、けつして誰かを傷つけたり、何かを貶めたりする意図をもつて書いたわけではありません。ここにあるのは、作者たちのもとも純粹な不思議感覚の表現です。ぜひ、心から楽しんでお読みいただければと思います。そして、受身の学びにとどまらず、ふるさとへの創造的な関わりを、文芸という形で見せてくれた6人の若い作家たちに、ぜひ、感想をお寄せください。田原市中央図書館に送っていただければ、責任を持ってご本人にお届けします。よろしくお願いいたします。

最後に、悠崎仁先生をはじめ、この企画にご協力くださいましたすべての皆様に心から感謝申し上げます。

田原市図書館長 豊田高広

まえがき

目次 / 作品舞台地図

優秀作品

みちやだめ

参加作品

おもいびと

神様の仕業

七不思議探検隊

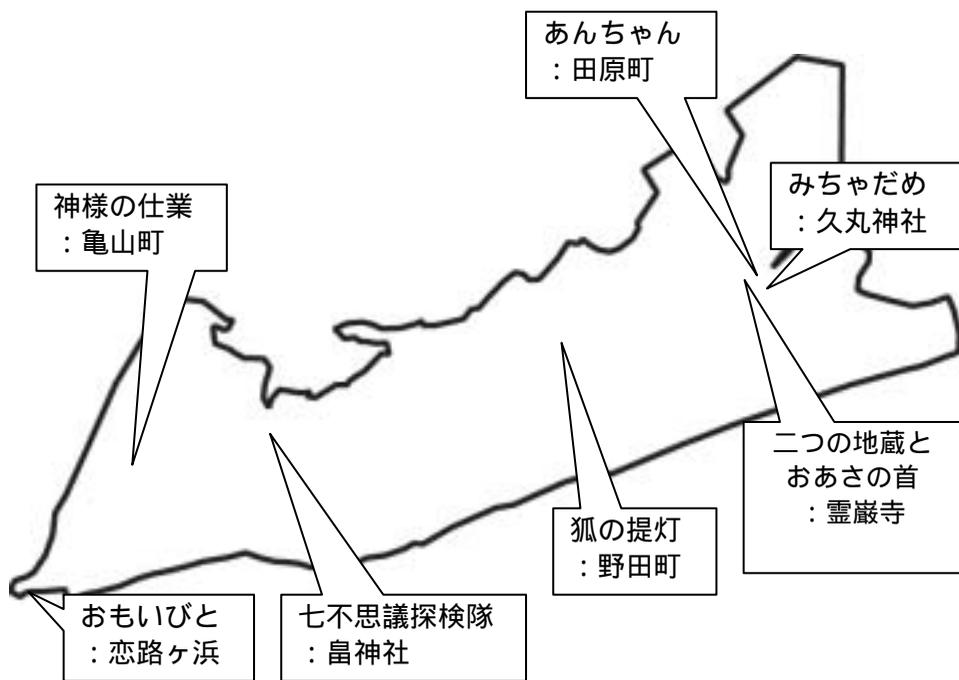
あんちゃん

二つの地蔵とおあさの首

狐の提灯

参加作品講評 / 解説

18 16 15 12 11 9 8 3 2 1



やしの実不思議塾 1st

「ティーンズ怪談学校」優秀作品

みちやだめ



やしの実不思議塾 1st

「ティーンズ怪談学校」優秀作品

みちゃだめ

伊藤（田原市在住 高校2年生）

「寝祭り（*）ってというのはさ、お家でやるもんなんだよ。」

まあ、それが、お祭りというか、ただ家で寝るだけの行事なんだけど、と、加子が得意げに話した。

「そんなもん行事にならん」

と、利奈が言い返した。利奈は、腹を立てているようであった。

「だいたい、なんでお祭りなのに、おとなしく家に閉じこもっておねんねなんか・・・」

「久丸様を見たら、目、なくなるよ。」

「は？」

意味がわからない、というように、利奈が返した。

すると、加子のやわらかい声が、

「久丸様っていうのは、神様のお祭りだね、家から出たり、窓を開けたりして外を見ると、久丸様を見るこ

とになるんだ。それで、久丸様の姿を見た人は、久丸様に目をつぶされちゃうんだ」

引越してきたばかりの利奈には初めての寝祭りになるね。

と、続けた。

「久丸様って恥ずかしがり屋？」

「まさか！ 久丸様はね、ここに来たとき、酷いお顔と体になってたの。そんな自分を見られるのが嫌だから、目をつぶしちゃうの」

「そっか」

それから2週間程が過ぎ、祭りの日となった。

家は、窓も雨戸も全て閉めきり、家の中から外の様子をうかがえるものは全て遮断された。

こうなってはなにもやることがない。ただ、つまらないだけの時間が過ぎていき、寝るにもなんだか眠れなくなってしまうた。

利奈はトイレに行こうと二階の自室を出て、一階へと降りた。

その際、玄関の扉が目についた。

玄関にはさすがに雨戸はついておらず、にこりガラ又のせいでばやけてではあるが、かすかに外の様子がうかがえた。

ふと、加子との会話を思い出した。

利奈は好奇心で、玄関の扉をそっと開けて、外をのぞいた。

外は、雨が降っているだけで、利奈は、

「久丸様なんていないじゃん」

と、心の中で悪態をつき、扉を閉めようとした。

だが、何かがそれを阻んだ。

青白いような爛れた手が、扉と利奈を掴んだ。

と、同時に引き寄せられ、玄関から外に引きずり出された。

しゃがみこんだ視線の中には、爛れた足があった。

おそろしくて顔をあげることができなかった。

頭上から、すうつと息を吸う音が聞こえ、野太い声で、

「見たな」

と聞こえた。

そして、

「あれだけ見ちゃだめって言ったのに」

という声におもわず、顔を上げた。

加子の声だった。

しかし、相手の顔が暗くて見えない。声をあげようにもあげられず、目をきつくつむった。

ゆっくりと再び目を開くと、あたりはあかるく、布団にくるまっている状態。

夢だ、と悟った。

しかし、加子のあの声はなんだったんだろうか。そう思い、手元のケータイに目をやると、メールが一件入っていた。

「こんばんは」

目は平気？ つぶれてない？

私、見ちゃだめって言ったよね。

深夜、加子からのメールであった。

*「久丸様」を祀る祭礼。毎年2月上旬、田原市神戸地区の久丸神社と神明社の間で渡御の神事が行われる。その渡御の行列を見た者は、厄災に見舞われるとされ、渡御の時刻になると里人は家にこもり、雨戸を閉める。その様子から「寝祭り」と呼び慣わされてきたのだという。(東三河広域協議会発刊

「ほの国通信14」等をもとに選者注釈)

優秀作品選評

一読して、

「見てみたい」

という欲求に駆られた。奇祭といつてよい、この「寝祭り」を、である。

「つるのおんがえし」を筆頭に、「ミテハイケナイ」は、聞き手や読み手を即座に呪縛する。

見るな、と言われれば、見たくなるのである。

読者にその心理が働くことを、作者は、高校2年生の直感で見抜いた。

しかも、読者の見たい、という意識は、作者の設けた「雨が降っている」という設定で妨げられ、じらされる。

顔をあげても、雨や雨雲のせい、「久丸様」の正体が見えないのである。雨は、陰鬱をあらわす舞台装置としての役割も担っているだろう。

加子と利奈は友人であろうが、加子には利奈への憎悪があったのではないか、という読後感が残る。そこも怖く、巧い。

わが身をふり返ってみればわかる。完全に対等な友情はない。

両者には、どこかに優劣があり、優れた者に、劣る側は憧れ、そして、密かに嫉妬する。

「ともだち」というポピュラーな、しかし、微妙な関係性を使い、読者に現実感を持たせ、飽きさせないテクニクも非凡である。

本作は、見てはいけぬものを見たのだから目が潰れるに違いない、と読者に思わせておき、目を潰さないというオチをとった。

これも高評価のポイントのひとつだ。

が、だからこそ、加子が目を潰さなかったのは、なぜか、という疑問も残される。

彼女にとっては、その程度の制裁で満足だったのか。あるいは、それこそが利奈への恨みの深さを示すものなのか。

いや、それ以前に、この奇祭にまつわる加子とは何者なのか、という大きな疑問がある。

余韻をいろいろ味わえるのも嬉しい。

それにしても、ほんとうのところ、どうなのか。ますます、寝祭りを「見て」みたくなつた。

選者代表

悠崎 仁

やしの実不思議塾 1st 「ティーンズ怪談学校」

参加作品（作者五十音順）



おもいびと

伊藤（田原市在住 高校2年生）

私が勤務しているホームヘルパー先のおじいさんには、美代子さんという、今でも忘れられない女性がいるそつだ。

その人は、つい一年前に亡くなった奥さんではなく、若い頃に交際していた相手らしい。

美代子さんとは、恋路ヶ浜で別れたそつだ。別れた場所が場所であつたせいもあるが、おじいさんは、美代子さんに末練を残したままであつた。

結婚後もおじいさんは恋路ヶ浜に向き、美代子さんを探し続けた。

もつとも、今では身体を動かすこともできず、青いバジャマに身を包み、ベッドに寝転んでいるため、そんなこともできない。

おじいさんの家を出ての帰路、遠回りではあるが恋路ヶ浜側の道路を走ってみようと車の方向を変えた。

夕日も顔を隠し始め、辺りが薄暗くなる頃だつた。

運転を続けながらも浜辺へと視線を移すと、一人の人影が見えた。

あまりよくは見えなかつたが、かすかに青っぽい服装を身にまとつていた。

人影は走つては転び、走つては転びを繰り返していった。

走る姿はヨタヨタとして、老体のようではあつたが、起き上がり、再び走る姿は力強く、それでいて焦っているようでもあつた。

「まさか」

と思つたが、今のおじいさんは、起き上がることさえ困難だということを思いだし、そのまま帰路に着いた。

翌日、おじいさんの家を訪ねると、おじいさんは、私と目を合わさずに一言、ぼやいた。

「美代子さんを探す夢を見たんだ。浜辺を走つたけど、あの人は、また見つからなかつた」

いやな汗が背中を這い、鳥肌がたつた。

そのまま、いつもの作業どおり、足元の布団をまくり上げると、おじいさんの膝に昨日まではなかつた、真新しい傷があつた。

あきらかに床ずれではないと悟つた。

「生き霊つて知つとる？ おじいちゃん」

神様の仕業

鬼塚帝城（おにづかみかど）
田原市在住 高校1年生

田原市亀山町は、僕が住んでいる所だ。この亀山町で一番奇妙なもの、それは、畑しかない所にポツンとある三本松さんぼんまつと呼ばれる神社である。

何百年も昔からある神社だ。誰も気味悪がつて入るうとしない。なぜなら、悪いうわさがあるからだ。

小学生の頃、僕は、学校の課題でその神社を調べることになった。

あまり気は進まなかった。でも、少し興味があつた。なぜ、そこにありつづけるのか。なぜ、この神社はそこまで気味悪がられるのか。それが知りたかつた。

まず、友達に訊いてみた。そうしたら、

「あそこの木々を切った人が何人かいるんだけど、木を切った人達は、皆、近いうちに事故に遭っているんだ。それも、結構、大きい事故。だから、あの神社の木が切られることはなく、ありつづけてるんだ」と恐々と僕に語つた。

「ぼくは、恐くて鳥肌が立つた。」

「じゃあ、気味悪くなつて、恐くて、もう誰も木を切

れないつてこと？」

「そういふこと」

僕の心境は、恐怖半分、興味半分だつた。恐いもの見たさが、当時の僕にはあつた。

「近いうちに見に行こうかな」

「気をつけるよ。あそこ、蛇が出るから。前、白い蛇の抜け殻があつたから」

この一言で、恐怖の割合が増えた。なんてことを言うんだ。

そして、次の日、その神社の目の前まで行つた。でも、恐くて入れなかつた。

お父さんに、三本松について訊いてみた。

「昔、あそこは、雨乞いをする所だつた。百姓が雨が降つてほしい時、あそこにお供え物をして雨乞いをするれば、雨が降つたと言われている」

それを聞いて、僕は安心した。昔から、気味悪がられているわけではないことを知つたからだ。

「じゃあ、なんで今は、あんな風になつちやつたんだよ」

「それは、わからんけど、豊島神社と合わさつて、自然と雨乞いをしなくなつたからだと思つ」

「へえ、そうなんだ」

僕は、この三本松の生い立ちをすこしだけ知って、
気持ちが悪くなった。

僕は、次の日、驚きの事実を知った。

三本松の後ろ側に住んでいる友達が、こんなことを
言ったからだ。

「知ってる？ 三本松って、斜め後ろから見ると、神
様が座っているかのように見えるんだ」

「ウソだろ。じゃあ、他の人にも訊いてみるわ。たぶ
ん、ウソだろうけど」

で、他の人に訊いてみたが、実際にそう見えるらし
い。

「たぶん、蛇は、その神様の使いか何かじゃねえのか。
そんなもって、木を切ると神罰がくだされんじゃね
」と、軽く冗談まじりに言った。

でも、僕は、たぶんその友達が冗談で言ったことは、
正しいと思った。なぜなら、何かとつじつまが合うか
らである。

僕は、これを聞いて、別に気味悪がることではない
と思った。

小六の時、西ノ浜（しのはま）の開拓の劇をやった時、ここが戦
車の砲弾の練習場にさせられそつになつたと聞いた。

でも、町の皆が反対して、難を逃れたと言っていた。

もしかしたら、三本松の神様がずっと西ノ浜を見守
り、僕たちの土地を守ってくれたのかもしれない。

だって、軍は、もう、ここでほぼ決めていたらしい
し、人だけの力でどうにかなるもんじゃないかな、と
思ったからだ。

僕は、このことを他の人にもっと知ってほしいと思
つた。

僕は、当時、とても口が軽く、知っていることはほ
とんどなにもかもしゃべるような子供だったので、こ
のことも皆に話そうとしたが、できなかった。

話す前に必ず忘れてしまうからだ。

これも、もしかしたら、三本松の神様の仕業なのか
もしれない。

七不思議探検隊

キニア（田原市在住 高校1年生）

僕がまだ小学校四年生の頃の話。僕は、ふくえししょうがっこう福江小学校に通っていた。近くにははたけじんじや畠神社という名の、夜になると少々不気味な神社がある。

夏休みの自由研究のテーマを「地元七不思議」にした。

僕と友達のB君、Aちゃんの三人で、七不思議を確かめに行った夜のこと。

「この神社に出る謎の光……」

と、B君が呟いて、どれだけ時間が経過したか、そろそろあきらめて帰ろうとか、と思ったその時。

ボウ、と白い光がたくさん出現し、賽銭箱の辺りに集まってきたではないか。

物陰に隠れながらその姿をよく見てみると。

狐だったり、牛だったり、猫だったり、様々な形をした光が楽しそうに踊っているのがわかった。

その光はとても幻想的で、美しく、時間を忘れて見入っていた。

「今日はすごいものを見たねー」

と、B君と感想を言い合いながらの帰り道、Aちゃん
は、一人、蒼白な顔でただ黙っている。

B君と別れた後でも黙っているAちゃんが心配で、
「どうかした？」

と、尋ねたところ、

「私、さっき見ちゃったの。学校の屋上から、私たち
を見下ろしている女の子と目が合っちゃったの」

と、Aちゃん。

少し間を置いて、一言、

「赤いワンピースの」

と付け加えた。

地元七不思議、赤いワンピースの少女。

その少女と目が合った人間は、追いかけて、捕
まったら、何処かへと連れ去られてしまう。

神隠しだと言っ。

ゆっくりと、後ろを振り向く。

真つ暗な道に、一つの赤い人影。

あんちゃん

さとう(田原市在住 高校2年生)

毎朝、静かに手を合わせてから朝食を食べる。それが、ぼくの日課だった。

「いただきます」

と言つと、台所から、

「どっぞ。」

目の前からは、

「ちゃんといいただきますが言えて、偉いな」と返ってきた。

今日は、日曜日だから、パパもママも仕事が進みなの。ぼくの学校も休みだ。

だけど、家族で遊びに行く予定はない。なんとなく、ぼくは、家の外へ飛び出した。

何も考えずに歩いていたら、田原で一番都会っぽいお店なんじゃないか、とぼくが思っている「セントファール」を通りかかっていた。

このクレープ屋さんのクレープと、アイス屋さんのアイスがぼくの好物だ。

一か月五百円のおこづかいでそれを買つと、他のお

菓子が買えなくなるので、パパかママと来た時に買ってもらつようにしている。

ママは、「セントファール」より「パワーズ」のほうが好きみたいで、あまり連れて来てくれないから、どちらかといえば、パパにねだることの方が多い。

なんとなくそのアイス屋さん、クレープ屋さんを横切つて、裏の道路に出る。右を見ると、「はなとき通り」だ。

今、ぼくが歩いている「本町通り」と、その「はなとき通り」が交わるところに、一人の女の子が立っていた。

女の子は、明らかにぼくより年下で、少し男の子っぽい帽子をかぶっている。

その女の子が、手を振つてこちらを見ている。

呼ばれていると思う前に、ぼくの足は飛び出していた。

なぜか、なつかしい。

「あんちゃん、どこ行く？ うちが連れてつたげる。

うち、田原のことなら何でも知つとるから。な、どこ行く？」

女の子が笑つて、ぼくもつられて笑つた。右手をぎゅうつつかまれて、引つ張られる。ぼくと女の子の身

長差で、ぼくが前のめる形になる。

「お任せで」

ぼくが言つと、

「任せて！」

と、満面の笑みで女の子が言った。

そのまま引つ張られて狭い道に入っていく。何度か分かれ道を過ぎる。

さつきまで見ていた都会っぽい景色が一転した。

木造の家にブロック塀など、一気にタイムスリップした気になる。

変わつてないのはセミの鳴き声だけだった。

狭い道路から、やっと広めの道路に出る。女の子がすぐ横を指して言つ。

「あんちゃん、ここは「えいでん」ってゆう電気屋さん。ゲームとか、安く買えるつて、いっちゃんがゆつとつた！」

胸を張りながら、近くに建っている店を紹介している。なぜだか、とてもほほえましく思えた。

ぼくも、「エイデン」くらいは知っているけれど。

看板を見上げる。そこには、青と黄色の看板ではなく、黒と赤と白の看板があった。首を傾げて女の子に問う。

「なあ、看板、違くないか？」

「違くない。ずーっと昔から変わつてないで」

女の子は即答した。疑問を持ったぼくの手を強引に引いて、大きく立派な建物の前で止まった。「エイデン」から道沿いに真つ直ぐに行つたところだ。

ぼくの知つている建物と違つた。女の子はまた、胸を張つて言つ。

「あんちゃん、ここは「渥美病院」っていう田原で一番大きな病院」

違つ、ここは「あつみの郷」という介護センターだつたはず。

「あんちゃん、ここも電気屋さん。ここは「ヤマダデンキ」っていう。「エイデン」と何か違つか教えてほしい？ こつちの電気屋さんにはな、ゲーム売つたらんの」
違つ、非常口の人の絵のような看板を見て思つ。ここは、リサイクルショップだったはずだ。

「あんちゃん、このピンクいであかいのは「ジャスコ」つてな、お菓子に、おもちゃに、お洋服に、なんでも手に入る・・・」

「もういい」

嬉々とした表情で「ジャスコ」を紹介する女の子の口を無理矢理止めた。

女の子がぼくを見上げてくる。
きれいな目だった。

「どつしたの。何か分からんことあった？」

「ここ、どこ？」

「何言つとる。田原だよ」

「うそつくな」

「うそついてない！」

「ぼくの知ってる田原と違う。だもんで、うそだ」

「あんちゃんが知らん田原やない！ ここ、あんちゃん知つとる！」

女の子が泣きそうになっていた。ジャスコの後ろの方から「マクドナルド」が見える。

「なんだか古っぽい。」

「やっぱり違う。」

「あんちゃんはこの、知つとる。絶対知つとるって。」

「知らんはずないよ」

女の子は言い張る。ぼくが何も言わないと、おもちゃみたい、知ってる、絶対知ってる、知らないわけがない、と繰り返す。

最後には、本当に泣き出した。

「なんで、あんちゃん信じんの。昔、あんちゃんが教えてくれたで。うち、そのお返ししようと思っただけ」

なのに。あんちゃんに思い出してほしかった……」

女の子が最後まで言い終わる前に、すごい大きな音がぼくたちをぶつた。「マリオカート」でドリフトする時みたいな音だ。ぼくには出せない音。

もちろん、目の前で泣きじゃくる女の子にも出せない音。二人とも、今は手ぶらで、「マリオカート」なんて持つてるわけがなかった。

名前を呼ばれてそつちを見る。ママが立っていた。パパもいる。

「あんた、そんなとこで何立つとるの。こつち来なさい」

「道路のど真ん中なんて、危ないだろう！」

最後にぼくが立っていたのは、女の子を見つけた、あの交差点だった。

二つの地蔵とおあさの首

壮夜そうや（田原市在住 高校1年生）

「靈巖寺れいがんじには、首のないお地蔵様があるんだって」と、友人が言いました。

そこで、みんなで見に行ってみると、そこには、ちゃんと首のあるお地蔵様が二人並んでいました。

「やつぱり、ちゃんと首、あるよ」

「だけど、この首、セメントでつけられてゴツゴツしてるね」

昔、三宅貞三郎みやけていざぶろうとおあさという人たちがいました。

ふたりが仲が良いことがバレてしまい、貞三郎は切腹、おあさは自書をいいわたされたそうです。

貞三郎は、武士なので、りっぱに切腹したそうです。

しかし、おあさは、子供がいたので、叔父が泣きながら首を切ったそうです。

それをかわいそうに思った人が二人のために作ったお地蔵様だそう。

その話を聞いたとたん、みんな青ざめて走り出してしまいました。

お地蔵様は、おあさの首と同じように落ちてしまっ

ていたのです。

誰かがセメントで首をつけるまで、ずっと。

きつと、おあさの霊がやどっていたのかもしれない。ん。

しかし、今では誰かがつけてくれたので、お地蔵様の首が落ちることはありません。

狐の提灯

たかなしたかし
小鳥遊鷹師（田原市在住 高校1年生）

この話は、僕が福江小学校の生徒で6年生だったときのことだ。

夏休みに入り、卒業も近づいていた。今日は、全校出校日で、みんな学校に集まっていた。

「おー！ みんな久しぶり！」

同じ部活のSくんが教室に入ってきた。

「おお、Sくん久しぶり！」

部活があったときは、毎日のように会っていたが、部活がなくなってしまうので、会うのは久しぶりだった。

「ねえ、Kくんはどうしたの？」

Kくんも同じ部活で、SくとKくと僕は、よく遊ぶ仲だった。

「まだ来ないみたいだよ」

「そつなのか・・・どうしたのかな・・・」

もうすぐ一時間が始まってしまおうというのに、Kくんは来なかった。

僕とSくんは、先生に、どうして彼が来ないのか訊

いてみた。そうすると、

「家の人から電話がきていて、どうやら体調が悪いらしいよ。それから、今日、Kくんに渡すはずだったプリントを持って行ってほしいんだけど、いいかな？」と、言われた。

特に用事もなかったので、Kくんの家までプリントを持って行くことになった。

「はあ・・・あついなあ・・・」

学校を終えてKくんの家へSくと歩いていた。Kくんの家は保美にあった。

「お邪魔します」

家に入ると、Kくんのお母さんがいた。お母さんは、僕たちを見ると、少し焦った顔で、こう言った。

「学校の先生から話は聞いたよ。プリント持ってきてくれて、ありがとうね」

僕とSくんは、Kくんのお母さんと少し話をして、Kくんに会いに行った。

Kくんは、とても疲れた顔をしていた。

「どっ・・・どうしたんだよ、そんな顔をして・・・」
Sくんが思わず訊いた。僕もおどろいていた。

「来てくれたのか！ プリントも持ってきてくれてありがとう」

風邪を引いているようで、声はがらがらだった。

「実は、昨日は、野田のいとこの家に行っていたんだ。．．．それで、夕方になって、いとこの友達と花火をやることになったんだ」

「それで、どうしたんだ？」

「提灯みたいなものを持っていてる人を見たんだよ。それで気になって見に行っただ」

「だれだったんだよ」

「だれだかはわからなかったんだ．．．。近づこうとすると、すぐに離れて行っちゃうんだ。追いかけても、追いかけてもだめだった」

「他のいとこたちは、どうしたんだよ」

「走ってる途中に見失っちゃったんだ。それで、迷子になっちゃって．．．」

いとこたちがいなくなったことに気づいて追いかけるのをやめたらしい。みんなを探しているときに川を泳いだせいで、風邪を引いてしまったという。

いとこのおばあちゃんは、

「大明神の狐が昔、このあたりにいたらしい。近頃は見た人がいないから、めずらしい体験をしたのう」と、言っていたそつだ。

「風邪引いただけでよかったけど、もう二度と提灯は

追いかけないよ」

KくんとSくんと僕は、笑いながら、一緒にプリントをやりはじめた。

参加作品講評

「おもいびと」講評

伊良湖岬灯台から右に太平洋を眺めながら曲線を描いて歩く約1キロの砂浜。それが、恋路ヶ浜である。

「日本の道百選」、「日本の渚百選」、「日本の白砂青松百選」、「日本の音百選」に選ばれるだけのことはある、美麗かつ女性的な海岸線だ。

有名な民俗学者・柳田國男が、この地に逗留し、恋路ヶ浜で椰子の実を拾い、それをもとに友人の島崎藤村が国民歌謡「椰子の実」を作詞したのは、あまり知られていない事実である。

恋路ヶ浜という切ないまでの名は、高貴な男女の恋物語に由来するもので、今でも恋愛成就を求めるカップルが日本中から押し寄せる。

彼らは、思いの丈をメッセージに込め、願いの叶う鍵をかける。

本作は、その恋路ヶ浜を舞台に、老いた男の想いの深さを謳った物語だ。

この作者は、天候を作中に盛り込む技法が巧みだ。本作でも、その手腕をふるい、若き日の恋人を求め、

恋路ヶ浜を走る老人の青い霊体に夕暮れの背景を与えている。

そのコントラストが読者の心象風景に映える。

倒れる姿を目撃し、その証拠となる傷を後に発見するというオチの手法の確かさも、作者に作家としての骨格の存在を感じさせる。

恋路ヶ浜を象徴するはかなく美しいストーリーであるだけに、最後の一文を別の“何か”に変えると、老人が秘める執念にも似た純愛を包み込むような、さらにより作品になるだろうとも感じた。

「神様の仕業」講評

作中に登場する神社とは、三本松明神を指すと思われる。

この土地の名である「亀山」は、「神山」に由来するともいわれ、歴史的に重要な意味があったようで、民話の類も多く残存するらしい。

亀山町は、田原市の西端に位置し、西ノ浜は、その海岸線付近にあたる。

実際、戦時中には、試砲場があり、物語の最後に語

られるエピソードにも真実味を感じさせる。

神とはなにか。

主人公は、小学生の頃、神社の調査をする過程で、いつの間にか、そのテーマを負い、やがて、神の思わぬ実態に迫っていく。

神とは、白い蛇を遣わし、神木を切れば人々を厳しく祟る存在。

神とは、土地の人々を戦禍から守る存在。

主人公は、神の持つまったく異なるふたつの側面を知り、驚き、恐れる。が、それだけではないところがいい。

本作のおもしろい点は、いろいろあるが、ここでは、二点を挙げたい。

一点目は、三本松にある神社が雨乞いの対象ではなくなったと聞いた時、作者が主人公を暗澹たる気持ちにさせている点だ。

むかしは、雨乞いの儀式にすぎり、心救われた人々もいたはずだ。が、今はちがう。

人間は、都合よく神を利用し、不要になると、時代の中に置き去りにしていく。

作者の、そんな暗示的なメッセージが垣間見えるシーンだ。

一点目は、三本松の神社のことを語ろうとすると忘れてしまう、というラストだ。

伝説が隠され続ける理由を簡潔に表す、切れ味の鋭いテクニクだが、それだけではない。

それを思い出させ、本作に載せることを許してくれたこともまた、「神様の仕業」かもしれない。そんな余韻を読者に残してくれるのだ。

本作は、前半から中盤に神の恐怖を語り、最後に、神のもたらす慈愛を示している。この展開が、読後、本作にあたたかみを感じさせる。

三本松が神の座った姿に見えるという作者の記載は、地元民らしい貴重な証言だ。

こういう逸話を掘り起し、伝えられるのも、この企画のニーズのひとつだろう。

さらに多くの作品を手がけ、書き込み、書き慣れていくことで、素材を活かしきる作家へと脱皮できるかもしれないと感じた。

「七不思議探検隊」講評

畠神社は、田原市福江町ふくえちょうにある。歴史も豊かで、
経津主神つんぬしのかみなど錚々たる神々
が祀られている。

この神社は、福江小学校の裏手にあることから、
本作に描かれる現象は立地条件として説明が可能であ
る。

境内には、樹齢200年もの巨木があり、田原市名
木百選に選ばれている。

さて、今回集まった7作品の中で、本作は画期的な
要素が強い。

まず、畠神社には、動物の形をした美しくも妖しい
光たちが出現するということ。

さらに、小学校と神社にまつわり、赤いワンピース
の少女による神隠し伝承があるという点だ。

とくに、後者は、都市伝説風のテイストを持ち、新
しい民話になるポテンシャルを感じる。

前段の幻想性を打ち消してあまりあるほどに後段の
展開は恐ろしい。雰囲気異なるふたつのパートをス
ムーズにつなぐ筆運びも巧い。

文末の一行もインパクト満点だ。

光が動物霊と仮定して、なぜ、動物霊が畠神社に参
集するのか。赤いワンピースの少女とは誰なのか。

可能性としては、動物型の光の群れと赤いワンピース
の少女にはなんらかの相関がある、という考え方も
できる。

ひとりの読者として、畠神社とその界限に強い興味
を惹かれる作品だ。ぜひ、探検したいと思わせてくれ
る。

それだけに、できれば、もうすこし長文で、じつく
りと楽しみたかったという欲も残る。

「あんちゃん」講評

力作である。何度読んでも、作者の筆力と作品自体
の力が損なわれない。

現在、市内に実在し、市民が日常生活に利用する多
くの施設と、その位置関係を巧みに用いて違和感がな
い。

故意に時制を不安定にさせながら、物語の迫力を保
ち続けるパワーもある。

これは、セミの鳴き声という記載によって、読者が

「お盆」を想起させられるためかもしれない。

夏は、死者が現世への帰還を一時的にゆるされる季節である。

それにより、読者は、不安定な時空間の存在を無意識に許容でき、自然に読み進められるのかもしれない。

そして、なにより、最後の一瞬まで読者を飽きさせないスピード感が、本作にはある。これは小説において重要な要素だ。

主人公の「ぼく」と「女の子」の間には、どのような関わりがあり、なぜ、主人公はすべてを忘れ果て、「女の子」はすべてを覚えていたのか。「パパ」と「ママ」は、何かを知っているのか。

なぜ、「ぼく」は、食前に静かに手を合わすのか。そもそも「女の子」は生きているのか。

それらの疑問を読者が抱くであろうと予測しながら、敢えて説明しない手法も心憎く、気持ちがいい。

この作者には多くを説く必要はないだろう。これからも書きつづけたいと思うかぎり、その力はどこまでも伸びていくはずだからだ。

ただ、複数の施設を登場させる場合、登場人物とを印象的にむすびつけて描くと、さらに秀逸な作品とな

るだろうとも感じる。

たとえば、一回だけ登場する「いつちゃん」という人物を関連させることで、「ぼく」と「女の子」は、幼い頃、登場させた施設のどこかで遭遇している、という展開を匂わせてもよかった。

しかし、これも、この作者なら、書き込んでいく過程でクリアしていくことだろう。

できるならば、作者には、自分の中の輝きを信じ、さらにその輝きを高めることを望む。

「二つの地蔵とおあさの首」講評

霊巖寺は、田原藩主三宅氏累代の菩提寺。市内の田原町にある。

これは、田原市に伝わる有名な悲恋の物語だ。

貞三郎は、藩主の甥という由緒ある家柄。対して、おあさ（於阿佐）は、一介の藩士の娘。そのふたりが、恋に落ちた。かなわぬ恋である。

しかも、おあさは、子を宿していた。

が、自分の壁は、非情の白刃となって、子をふくめ3人の身に振り下ろされた。おあさは、子を胎内に置

いたまま首を斬られたのだ。

これは、その墓所近くに建てられた地蔵が、繰り返して首が落ちるといふ伝説である。

それを現地で聞かされた人たち、とくに、女性にとって、その話は、まさに、逃げ出したくなるほどの恐怖だったにちがいない。

女性にとって子供を授かることの意味は、男性以上のものがあるだろう。

もし、自分が、封建社会に生まれ、自分には不釣り合いな高い身分の男を愛してしまったとしたら。

しかも、その男性の子を宿したまま、自害を迫られたら。

おあさは、どれほど、無念だったことだろう。

その悲しみまでも、作者の胸中には去来したのかも知れない。

殺すことはなかったはずだ。まして、お腹の子供まで。

女性である作者の、その純粋な想いを込めた一篇と感した。

登場人物たちを書き分けると、恐怖の感覚がもっと鮮明に読者に伝わると思つた。

「狐の提灯」講評

これは、野田町のできごとである。いとこのおばあちゃんの言つ「大明神の狐」が、どこのなにを指すかは不明だ。

「狐の提灯」というタイトルからは、のどかで牧歌的な印象も漂う。

が、そのまま追いかけて続けたら、Kくんは、あるいは、風邪どころでは済まなかったかもしれない。

「狐の提灯」伝説は全国に分布している。そもそも「狐の提灯」とは、「狐の嫁入り」と関係がある。

ここでいう「狐の嫁入り」とは、晴天から雨が降る現象のことではない。

夜、狐が嫁入りのため、火の列をなして進む。それが「狐の嫁入り」である。

別名、狐火。鬼火ともいう。

つまり、Kくんが追いかけた火は、死者の魂がいざなう燐光だったのかもしれないのだ。

二度と提灯を追いかけない、というKくんの言葉は、読者に対するメッセージであり、戒めであろう。「狐の提灯」は、異界への入り口なのだ。みだりに関

わつてはならない。それを暗示する大切な一行のよう
に感じる。

古風な民話を現代的で若々しい会話が彩り、今に生
きる者の感覚として読者に伝えているところも評価し
たい。

前段をコンパクトにして、提灯を追いかけるシー
ンや古老の語りの部分を膨らませると、さらによい作品
になるだろう。

解説

10代の少年少女に、故郷である愛知県田原市を物語
ってもらう。「怪談学校」とあるが、血も凍るようなホ
ラー小説を書くのではない。

書くのは、「ふしぎ」小説である。

ここでいう、「ふしぎ」とは、不思議と奇妙と恐怖の
中間に位置するものだ。理解できず、珍しく、そして、
ちよつと怖い。そんな話だ。

難解なテーマだったと思うし、原稿用紙に向かい、
わずか3時間で書き上げるのは、相当な困難でもあつ
ただろう。

正直なところ、一篇も書きあがらないのではないか、
という不安もあった。

だが、ほくたち選者の不安は、じつに鮮やかに一蹴
され、6名の参加者の手から7つの作品が生み出され
た。

瑞々しいという点において、7作品に甲乙はつけら
れない。

当日、執筆の現場に居合わせた者として、6人の若
手作家たちは、企画者の意図を理解しようと自ら努力
し、結果を出そうという気概にみちていた。

それが困難に打ち克つ原動力になったのだと思つ。
7つの作品は、田原市内の異なるエピソードを用い
て著された。企画者側からの注文ではない。すべては、
作者たちの自由意思によるものだ。

これが、今後に期待を持たせる。

田原市には、掘り起こすに足る物語がいくつもある
ことを予感させるからだ。

第1回となった今回の優秀作品は、伊藤氏の「みち
やだめ」に決まった。

寝祭りという、地元では有名であり、全国的には無
名の奇祭をテーマに据え、奇祭の「ふしぎ」さからス
トーリーの軸を逸らさず、現代的な視点で奇祭に関わ

る人間模様の機微を描き出した点が評価された。

だが、他の6作品には、優秀作品にはない美点と特性が数多くふくまれている。

素材の選び方が巧いもの、ストーリー・表現がすぐれているもの、未知の民話に光を当てたものなど、選者たちを悩ます要素が満載の第1回だった。

さて、今回の企画から、田原市は、いくつかの民俗的エピソードを得た。それを列記してみる。

三本松：神の座った姿に見える。戦火から住民を救う神であり、神木を切る者を祟る。

畠神社付近：動物の形をした光の乱舞。神隠しにまつわる赤いワンピースの少女が出現する。

野田町付近：狐の提灯が出現する。

ざっと挙げただけでも、地元でも初耳であるう事実が3つも発掘された。まっすぐな6つの感性が可能にした、これは大きな成果である。

この作品集を見るすべての読者は、6人の10代の作家の今後に期待するとともに、今、自分たちが住む街・田原市に想いを馳せていただきたい。

今日の文化は、明日には遺産になる。今日の田原市

の魅力を散逸させず、明日に伝えるために、多くの市民に広く協力を願いたい。

以下に優秀作品以外の6作品の講評を添えた。

文末になってしまったが、この画期的な企画にほくを加えてくださった愛知県田原市図書館長豊田氏ならびに同図書館の渡邊氏他多くの関係者の皆様に、この場を借りて、心からお礼を申し上げます。

やしの実不思議塾1st 「ティーンズ怪談学校」

講師・選者代表 悠崎 仁

悠崎 仁氏 プロフィール

小説家。ショートホラーで、創英社主催第10回超短編コンテスト優秀作品賞を受賞。同社刊「超短編傑作選」3「および」超短編傑作選「4」に作品を掲載。光文社主催「すこぶる奇妙にこわい話」コンテストで佳作となり、同書に入選作を掲載。電子書籍では、ファンタジーなど、すでに30以上のコンテンツを発売するなど、幅広く活躍中。産業カウンセラー、ペットロス・ケアサポーター。獣医師免許を持つ。

おことわり

本作品集の作品は、平成23年7月31日開催の「やしの実不思議塾1stティーンズ怪談学校」にて、田原市の地名、史跡等をモチーフに創作されたものです。実際の人物、団体、行事等とは関係ありません。

みどりの翼増刊号

『やしの実不思議塾1st ティーンズ怪談学校作品集』

発行 平成23年10月15日

発行者 田原市図書館

連絡先 愛知県田原市田原町汐見5番地

TEL (0531) 23 - 4946

FAX (0531) 23 - 4646

tosho@city.tahara.aichi.jp

収録作品の著作権は、田原市図書館に帰属します。

本書の無断転載を禁じます。

© Tahara city library 2012

